

ほくか考える日本の答えの出ていない問題は、障害のある子供を育てる親が日々の家事や育児に追われて、なかなか休むことができないということだ。

なぜほくかこの問題について、述べようと思ったのかというところ、ほくのいところか、発達障害の一つである自閉スペクトラム症であるからだ。こだわりが強く、かんしゃくを起こしてしまふこともあるので育児がとても大変だ。何でも時間がかかっってしまう。ほくのお

はは、食事の片づけ、いとこの着かえ、よごれをしまつた床のそうじ、などの家事で一杯になつていて、十分なすいみん時間かたれない。また、自分が病気になることも、休むことができないのだ。

国は子供に、療育やデイサービスなどの支援を行つている。それに、国は助成金などを送つたりして、金銭的な補助は行つている。そのため、家族は金銭的な面では助けられてゐる。しかし、親のする家事や育児のサード

又は行わねていない。障害のある子供を育て  
なから、家事を行うことかど木だけ大変なこ  
となのか。その負担はすべて親にかか。てい  
る。

この状況をぼくは見て、解決しなげねはな  
らないと考えた。そこで、ぼくは「障害者家  
族地域サポート制度」という仕組みを考案し  
た。「障害者家族地域サポート制度」とは二  
つの仕組みからなる。

一つ目は、地域の主婦サポートによるお

手伝いサービスだ。まず、サポートを集め  
る。そのサポートは、地域の年配の主婦や、  
長時間働くことはむすかしい子育て中のお母  
さんたちが中心だ。そのサポートの人たち  
にアプリを入手してもらう。そのアプリにはそ  
の家族の人がやってもらいたいことの内容と  
そ本にかかる所要時間の情報が送られ、サポ  
ーターの人たちが知らせか入る。例を挙げると、  
「食器を洗ってほしい。所要時間三十分」  
「洗たく物をたたんでほしい。所要時間三十

分」などだ。そして、サポーターの人たちの  
中でそのマイニングでできる人が実際に、そ  
の家族の家に行って手伝いをするという仕組  
みだ。しかも、そのサポーターの人たちはホ  
ランテイアではなく、時給がもらえる。その  
お金は、国がまかなうことにする。そうすれ  
ばサポーターの人は、三十分、一時間単位で  
手伝いに行くことができ、時給もあるので、  
少しだが、収入を得ることができる。主婦な  
どの家の仕事をしている人でも短時間だけな  
らうと思っただけで参加し、主婦の社会での活躍の場  
が増えることになる。そしてこの制度の最大  
の長所は、地域のつながりが生きてくること  
だ。身近な所で声をかけてもらったり、見守  
ってくれる人がいることで親が地域の中で孤  
立しなくなる。地域の人たちから温かい目で  
見てもらえることにより、親が安心して生活  
することができるといえる。

二つ目は、地域の病院に並設された障害者  
の家族専用のシェアハウスを設けることだ。そ

の役割は親が病気になつたときにたよること  
かできない場所になることだ。親が病気の時  
に子供はシエルターの保育士さんにあずけて、  
親はシエルターの別室でゆっくり休養をとる  
ことかできる。同じシエルター内にいること  
で子供の様子を聞くことができ、安心して休  
むことかできる。

この二つの仕組みがあれば、親の負担が少  
しは軽くなる。「障害者家族地域サポート制  
度」は実家のお母さんに助けてもらうような  
感覚で気軽に利用していいのだ。

このような制度を実現させるためには、国  
に認めてもらう必要がある。そのためには、  
このような制度をほくは国会で提言しなけれ  
ばならない。だから国会議員になる必要があ  
るのだ。しかも普通の国会議員ではなく、発  
達障害が専門の医師である国会議員になりた  
い。そうすればこの制度に説得力が生まれ、  
より実現性があいてくると思う。そのような  
人物になるには医学の道に進むために、  
猛勉強

強まらなければならぬ。

今、ぼくかにかぎっているこのえんぴつには、  
未来の人の命と生活がかかっている。分かう  
ない問題があるといって投げ出してはならぬ  
い。ごまかしている人たちを将来助けるには、  
まず目の前にある問題を解決する力を身につ  
けなければならぬのだ。だからこそ、これ  
からも、ぼくは勉強に真け人に取り組まなく  
てはならないのだ。ぼくは、自分の人生をか  
けて、将来困っている人を助けたい。ぼくは、  
将来困っている人を助けるといふ使命を持  
ているのだ。なので、医学部へ進学する人が  
多いラ・サール中学校を目指している。その  
ために、ぼくは鹿児島島の田舎町から鹿児島市  
内に引っ越してきて、勉学に励んでいる。も  
うすでに、この夢は動き出しているのだ。